尾道商業会議所記念館
第 24 回企画展示解説

2014年4月25日～2014年9月10日

テーマ　戦国乱世を生きぬいた尾道商人

城下町・侍町ではない、商人町・職人町としての歴史を平安末の開港以来、今日まで積み重ねてきた尾道（ここでは旧尾道市街を指す）にあって、戦国乱世の時代情景は、やや乏しい感があるように思われている。

千光寺山（大宝山）にあったとされる「権現山城」（木梨・鷲尾山城に拠った杉原氏の出城）、長江の福善寺境内地に伝わる「丹花城」（杉原氏の家臣であった持倉氏が在城と伝）など、地方全般に見られた、中小土豪による山城程度のものは各所に散在したようだが、史上に名だたる武将や、その歴史的事象とは無縁にあったように映る。

しかし、実際にはそうではなかった。戦国の世の裏舞台において、名将たちと関わり、その歴史的事象の末端部分を尾道も担っていた。

尾道の豪商としてその名が挙げられる、橋本家（灰屋）、亀山家（油屋）、島居家（住屋）、天野家（東屋）などよりも一段階旧い尾道の有力商人として、渋谷家（大西屋）、小川家（笠岡屋）、葛西家（松本姓にも分派、泉屋）の三家がある。

これらの三家は、共に中国地方の覇者にして西国の雄、毛利家と誼を通じ、毛利配下の商人、いわゆる御用商人として立ち回り、毛利からの扶助を受けると共に、尾道を含む御調郡の町政（代官職）をも任されていた。

本展では、NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の放送とも歩調を合わせる形で、戦国乱世の尾道商人にスポットを当て、毛利家と通じた尾道の旧豪商御三家をピックアップし、併せて、もう一方にある職人の側から、この時代を象徴する尾道の刀工（刀鍛冶職人）を一例として紹介する。

戦国～織豊期（安土桃山）の尾道年譜

西暦	元　号	事　　項	典　拠
1469	文明元	刀工（正則、重行ら）の尾道住が確認される	尾道市史
1494	明応3	刀工・其阿弥、時宗遊行二祖・他阿真教上人より、尾道の地にてその法号（阿弥号）を賜ると伝	尾道志稿
1507	永正4	大内義興の上洛に伴い、尾道と鞆に宿舎を用意	尾道市史
1523	大永3	毛利元就、家督を継ぎ吉田郡山城主になる	
1543	天文12	木梨の鷲尾山城（木梨杉原氏の本城）が、尼子の軍に攻められ落城	尾道市史
1550	天文19	元就、次男・元春を吉川家へ、三男・隆景を小早川家へ送り、これにより安芸国を平定（石見、備後の一部も支配下に置く）	
1555	弘治元	毛利軍と陶晴賢が宮島で激突（厳島の戦い）小早川は村上水軍を味方に引き入れる	
永禄年間（1558～1570）		小川氏（笠岡屋）、山県郡に来住し毛利に属す。後、尾道へ移る	芸藩通志
1560	永禄3	織田信長、桶狭間で今川義元の大軍を破る（桶狭間の奇襲）	
1563	永禄6	毛利隆元死没により、その子・輝元が毛利本家継ぐ	
1566	永禄9	毛利氏、山陰の尼子氏を攻め滅ぼす。これにより中国地方の殆どに相当する120万石を領する	
1569	永禄12	足利義昭、足利ゆかりの天寧寺へ寄り、扶持米130石を与える	天寧寺資料
1570	元亀元	織田・徳川連合軍が、浅井・朝倉連合軍を破る（姉川の戦い）	
1571	元亀2	毛利元就、死没（享年75歳）	
1573	天正元	武将（山名氏側近で但馬の城主）から出家した行栄法師により、浄土真宗本願寺派の福善寺が久保町浮島に開基（後、現在地の長江へ移転）	福善寺縁起
天正年間（1573～1592）		渋谷氏（大西屋）、毛利の御用商人になる	渋谷家文書
1576	天正4	千光寺山東山麓の善勝寺、同山頂の権現山城主・杉原氏の菩提所となる	善勝寺沿革
		足利義昭、備後・鞆へ下る	
1577	天正5	信長による中国地方攻略（対毛利戦争）始まる秀吉を司令官とする軍勢が山陽道を西進	
1578	天正6	足利義昭、浄土寺所蔵の尊氏以下4代の御教書を一覧し、これに証判を与える	浄土寺文書
		毛利水軍、織田方の九鬼水軍に敗退(第二次木津川口の戦い)	
1579	天正7	村上高吉（因島村上氏）、百島に西林寺創建、同地の茶臼山城に拠る	西林寺資料
		荒木村重の籠もる有岡城が落城。後、村重は尼崎城、花隈城（神戸）と転戦し、毛利家へ亡命 三原を経由して尾道へ至り、出家して身を隠す	陰徳太平記、武家方代三島海賊家軍日記
1580	天正8	石山本願寺が信長と講和し、大坂から退去 これにより信長包囲網崩れる	
1582	天正10	信長、本能寺にて明智光秀に討たれる（本能寺の変）。備中高松城水攻め中に急変を知った秀吉は、毛利と和睦し、中国大返しの大強行軍で引き返すと明智光秀を討ち果たす（山崎合戦・天王山の戦い）	
		小早川隆景、三原城に移る	
1583	天正11	秀吉の大坂城築城。石垣用の石材の一部として、浄土寺山の石が切り出されると伝	
		秀吉軍と柴田勝家軍が激突、秀吉が勝利し、信長の後継として名乗りを上げる（賤ヶ岳の戦い）	
1590	天正18	秀吉の小田原征伐で北条氏敗北。天下が統一	
1592	文禄元	秀吉による朝鮮出兵（文禄の役、初回）により毛利の軍勢も動員。渋谷氏も徴発され、物資輸送に従事。	渋谷家文書
文禄年間（1592～1596）		朝鮮出兵に伴う九州からの帰路、秀吉が尾道へ来着。小川家の屋敷（本陣）へ滞在、主人より茶の湯の接待を受けると伝	小川家文書
1595	文禄4	小川氏（笠岡屋）、葛西氏（泉屋）、毛利家より扶持を受け、御調郡の代官職に任じられる	小川家文書
1597	慶長2	秀吉による朝鮮出兵（２回目）により、毛利の軍勢も動員。渋谷氏も徴発され、物資輸送に従事	渋谷家文書
1600	慶長5	笠岡屋初代・小川壱岐守道海、納経立石を建立（正授院境内に所在）	
		関ヶ原の戦い	

毛利と旧豪商御三家～大西屋・笠岡屋・泉屋

渋谷氏は、毛利氏に従って相模国（現在の神奈川県）から安芸国の吉田（安芸高田市吉田町）へ来着し、渋谷対馬なる者が代官として、尾道へ至ったとしており、また、一方で武士から帰農した上で尾道へ来たという見解もある。いずれにせよ詳しい来尾の時期は不明であるが、元就の孫にあたる毛利輝元の時代、尾道にあって毛利絡みでの活動が記録（渋谷家文書）に残る。その活動中、最も大きいものと思われるのが、秀吉による朝鮮出兵（文禄の役）の時であった。

尾道代官と兼務して毛利の御用商人であった渋谷氏は、朝鮮出兵に従軍する毛利軍の軍需物資の調達・保管・輸送の後方支援を担った。それらを記録した「渋谷家文書」には、「合薬」（鉄砲の火薬）、「鉄砲箱」、日本刀の材料となる「鍛鉄」といった軍事物資から、「兵糧米」、「酒樽」、「味噌づけ」などの供給を毛利氏、或いは傘下の小早川氏から命じられている。また、天下分け目の関ヶ原においても、西軍総大将となった毛利氏の後方支援を同様に担っている。

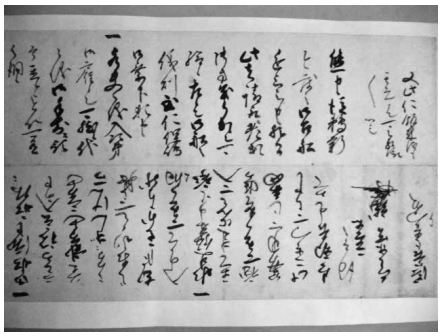
こうした功により、渋谷氏は毛利家から評価且つ庇護されていたようで、在地の旧勢力であった木梨氏から睨まれ、あわや尾道追放の危機に際しては、毛利家が仲裁に入り、渋谷氏を守った他、輝元との間で、備中（岡山県西部）・美作（同北部）辺りの所領を、渋谷氏に給付するとの約束も交わされている。

関ヶ原における毛利方敗退により、その下で動いた渋谷氏も衰退が予想されるところだが、「渋谷家文書」には、福島正則、次いで浅野氏統治の江戸時代以降もその活動を変わりなく記録しており、江戸初期には、月行司（毎月の交替制で町政事務を執る役職）の筆頭、組頭の役職を務めているなど、毛利時代から続いて、町政においても一定の権威を保持していたことが窺える。

小川氏は、畿内の武将・小川壱岐守道海が毛利家の扶助を得て、芸北山県郡を経由して尾道へ至ったのが始まりとされ、

尾道来着後は武士から商人へ転身。渋谷氏と共に毛利配下の商人として立ち回り、朝鮮出兵の文禄の頃には、毛利家から御調郡の代官職にも任じられた。

葛西氏は、泉屋一相なる者を初代とし、小川氏と共に御調郡の代官職を得、毛利家からの扶助を受けた。本家泉屋の他に、今蔵屋、胡屋など分派して栄え、この内、分家の小今蔵3代目の重政は、藩主浅野家への政治献金の褒美として、向東沖に浮かぶ小島「賀島」（現在は加島と表記）を賜った。



毛利氏
奉行人書状
※広島県立文書館蔵

秀吉滞在伝説を秘める本陣小川屋敷

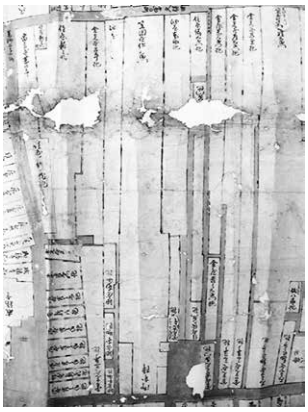
毛利配下の有力商人であり、また、御調郡代官にあった笠岡屋小川家の屋敷は、西国街道筋にあたる現在の本通り商店街に面し、同界隈特有の南北に細長い、いわゆる「うなぎの寝床」型式の間口にあった。この、他の商家と変わらない商店兼住居の小川屋敷は、一方で大名や幕府高官などVIPが宿所とする公的な「本陣」でもあった。

本陣の設定は、江戸時代以降のことになるが、それ以前において、本陣の素地ともなり得る逸話が、小川屋敷には秘められている。それがかの太閤豊臣秀吉が滞在したとの伝説である。

江戸後期に編まれた地元の地誌『尾道志稿』が伝えるところによると、1592（文禄元）年、朝鮮出兵で九州名護屋の陣へ赴いた秀吉一行が大坂へ帰る道中、尾道で止宿。宿所として、小川家の屋敷が充てられた。

秀吉を迎えた二代目当主・小川又左衛門は、茶人としても知られた公を茶の湯でもてなそうと、尾道中の井戸水を調べ、最良として選び出された長江の「柳水井」（現存するが現在は飲用出来ない）の水を用い、秀吉に一服を献じたという。また、秀吉から所望され、馬を献上したとも伝える。

出立の際には、又左衛門は秀吉一行を福山まで見送り、その時、秀吉から褒美として銀銭を賜ったとし、秀吉滞在の間は、以後「太閤御座の間」と称するようになった…としている。



尾道町絵図(1821(文政4)年)より、
本陣小川屋敷とその周辺部分
※尾道市立中央図書館蔵

渋谷家文書
※広島県立文書館蔵

秀吉や毛利側の公式文書には語られない部分だけに、また、家格を高める為に、自家の由緒来歴を捏造する事例（偽の家計図作成が最たるもの）も往々にしてあるだけに、あくまでも伝説として捉えるよりほかないが、柳水井の故事などは、尾道における茶の湯の営み、その盛んなりし情景を偲ばせる。

戦国の職人　～幻の刀工 辰房～

尾道は、「商人のまち」であると同時に、「職人のまち」でもあった。旧市街の古地図や旧地名（字名）に、「石屋町」、「鍛冶屋町」、「杓屋小路」、「塗屋小路」、「研屋小路」と、職人街が点在し、その営みを偲ばせる。

この内、鍛冶職人は中世に遡る古い尾道の職人であり、とりわけ刀鍛冶でその名を知られ、名刀工も多く輩出された。

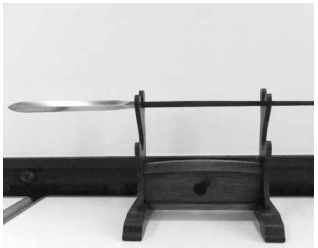
尾道でその腕をふるった刀工集団は、「其阿弥」・「五阿弥」と称する系と、「辰房」（たつぼう、或いは、たつふさ、ときふさと解する資料もあり）と称する系統に分かれ、その源においては共に、鎌倉末期～南北朝初期にかけての刀工「三原正家」を祖（初代）とする。

其阿弥・五阿弥系の流れについては、資料及び遺された作品共に比較的豊富であるのに対し、辰房系は家伝その他資料において乏しく、それ故に『尾道市史』などでは、「幻の刀工」として紹介している。

その居住地も、其阿弥・五阿弥が長江の艮神社西側、「中ノ段」と呼ばれる界隈に確認されているが、辰房系刀工の居住地は判明していない。艮神社東隣の日蓮宗妙宣寺境内の井戸が、一説に「辰房の井戸」と伝承されていることなどから、艮神社周辺に位置した鍛冶屋町の内に、共に在ったのではないかと想像される。

萩藩毛利家がまとめた史料集『萩藩閥閲録』の内、1526(大永2)年、備後在地の武将・木梨氏と高須杉原氏との間で交わされた書状の中に、「辰房屋敷」の名が見えているが、文面から該当する尾道・三原の内で何処になるか、また、姓名か地名かなど、これだけでは判然としない。『尾道市史』では、この記載から推察して、辰房は称号ではなく、姓か地名ではないかとしている。

「重光」なる者を辰房系の初代とし、代々「重」の字が一字用いられる。南北朝時代～室町時代末期にかけての作品がこれまでに確認されており、尾道市立美術館の収蔵品には、1414(応永21)年の作で、【備州尾道住重光】の銘を刻む古刀がある。



槍(銘:備州尾道住辰房重貞作)
※尾道市教育委員会蔵

短刀
※山崎清春商店蔵